

一茶晩年の死生観

－「自力」と「他力」の中間者（凡夫）としての共生的生き方－

渡 邊 弘（作新学院大学人間文化学部）

1 はじめに

本論文は、江戸時代の文化・文政期を中心に活躍した俳諧師小林一茶（宝暦13～文政10、1763～1827）の晩年の生き方に焦点をあて、その壮年から老年にかけてどのように死生観を形成していったのか、またその特徴とはどのようにものを明らかにすることを目的としている。

一般に、いわゆる一茶調が確立された時期は文化期の後半、すなわち48歳以降の『七番日記』が編まれた時期といわれている。この時期頃から一茶は、自らの老いの自覚とともに無常観が強まっていくと同時に、現実の娑婆世界の中でさまざまな生きとし生けるものと共にしたたかに生きていこうとする執着心も強まっていくのである。とくに、一茶晩年になると、一方で「ことしから 丸儲ぞよ 娑婆遊び」（文政4年）の句のように、この世の中にどっしりと腰を据え、強烈な自我を全面に押し出しながら現実そのものの中で生きようとする「自力」の側面と、他方では「ともかくも あなた任せの としの暮」（文政2年）の句のように、阿弥陀如来に身を委ねながら生きようとする「他力」の側面、これら両面が一茶の中で決して矛盾するものではなく、むしろ自然に展開されていったと考えられる。では、一茶は、とくに晩年において、この「自力」と「他力」の狭間でどのような死生観を具体的に形成していったのだろうか。

2 一茶晩年の死生観の形成基盤～『七番日記』時代を中心に～

（1）一茶にとっての「晩年」

一般に「晩年」とは、一生の終わりに近い時期、年老いてからの時期を意味し、「晩歳」ともいう。最近、終活ブームという言葉をよく聞くが、これは人生の終わりをどのように迎えるかその計画と準備である。例えば介護、葬儀、墓などであり、中には「入棺体験」のイベントが人気を集めているらしい。（『読売新聞』2014. 8. 25記事より）現在では、長寿高齢社会であり、男性も女性も平均寿命が延びて80歳を超え、また100歳以上の高齢者も5万4千人ということである。したがって、現在では、人生の晩年も一層後にずれてきているといえるだろう。

だが、一茶の時代の平均寿命は疱瘡や虫などによる乳幼児の死亡率が高く20歳代の後半

であったといわれている。¹⁾ そのような中で、一茶は65歳まで生きており、当時としては長命だったといえる。では、一茶の場合の晩年とはどの時期か。便宜上、次のように時期を区分してみると、文政期となるかと思う。ちなみに、一茶にとっての文政期とは、50歳で郷里に定住し、51歳で義母義弟との遺産相続問題が決着、そして52歳で結婚して人並みの家庭をもつことができたが、それも束の間、その幸せな生活がわが子と妻の死などによりあっけなく崩れていった時期であった。一方、俳諧師としては、北信濃を中心とする一茶社中が確固としたものとなっていき、俳諧指導や歌仙を通して門人や俳友たちと過ごす日々であった。

- | | |
|---------------|-------------------|
| ① 第1期－天明期 | (19歳～26歳) |
| ② 第2期－寛政期 | (27歳～38歳) |
| ③ 第3期－享和期 | (39歳～41歳) |
| ④ 第4期－文化（前半）期 | (42歳～47歳)『文化句帖』時代 |
| ⑤ 第5期－文化（後半）期 | (48歳～55歳)『七番日記』時代 |
| ⑥ 第6期－文政期 | (56歳～65歳)『文政句帖』時代 |

(2)『七番日記』時代の死生観の特徴

ここではまず、一茶の死生観の特徴が明確に表出しはじめ、それが晩年の精神の円熟につながっていく上記の第5期、すなわち『七番日記』時代の死生観に関わる思想的特徴を見ていくことにしたい。

この時期、死生観に関わる思想的特徴として第1に考えられることは、一茶が、一方で自身の老いの強い自覚とともに無常観が深まっていく中で、他方では衆生が繰りひろげる「娑婆」や「うき世」への執着も強まっていくということである。ちなみに「衆生」とは、いのちあるすべてのもの、つまり人間をはじめとするすべての生物ということであり、仏語では、迷いの世界にあるあらゆる生類。仏の救済の対象となるものという意味である。仏教では、「わたくしは人間である」という言い方はせず、厳密な表現としては「わたくしは人間界の衆生である」となる。

まず、老いの自覚とともに無常観が深まっていく点についてであるが、すでに40歳半ば頃から老いていく自分の姿を詠んだ句が多いことに気づく。特に『七番日記』中にはそれが顕著である。おそらく一茶も、文化9年には50の坂に達し、「春立つや 菰もかぶらず 五十年」と詠んでいるが、人生50年といわれた当時の中で、衰えていくわが身を深く感じていたに違いない。『七番日記』の中で、身体の衰えを詠んだ句・俳諧歌を次に紹介してみよう。

ちる花や すでにおのれも 下り坂	(文化7年2月)	48歳
夕暮や 霞中(かすむなか)より 無常鐘	(文化7年3月)	48歳

死支度 致せ致せと 桜哉	(文化7年3月)	48歳
はつ雪や 雪やといふも 歯なし哉	(文化7年10月)	48歳
歯がぬけて あなた頼むも あもあみだ アモアミダ仏 あもだ仏哉	(文化8年7月)	49歳
かすむやら 目が霞むやら ことしから	(文化10年4月)	51歳
かくれ家や 歯のない声で 福は内	(文化10年7月)	51歳 ²⁾

一茶は、目はよかったようだが、歯はかなり早くから悪かったらしい。大切にしていた奥歯も、次に紹介する俳文のように、悲しくも抜け落ちてしまうことになる。

「十六日昼ごろ、キセルの中塞（ふさ）がりてければ、麦わらのやうに竹をけづりてさし入（いれ）たるに、中にしぶりてふつにぬけず、竹の先僅（わず）か 爪のかかる程なればすべきやうなく、前々より欠け残りたるおく歯にてしかと啞（くわへ）て引たりけるに、竹はぬけずして歯はめりめりとくだけぬ。あはれあが仏とたのみたるただ一本の歯なりけり。さうなきあやまちしたりけり。」（文化8年6月（49歳）の俳文）³⁾

また、一茶の無常観を象徴する語の一つが「露」である。一茶は、この時期、さらにこの「露」の句や俳諧歌を次のように多く詠み始めている。

露はらり はらり世の中 よかりけり	(『七番日記』文化9年)	50歳
露はらり はらり大事の うき世哉	(『七番日記』文化11年)	53歳
翌もあり あさてもありと 露の世の		
露を露とも 思（おもは）ざりけり	(『七番日記』文化12年)	54歳 ⁴⁾

人間の一生などははかないものであるが、「露の世」を露とも思わないで生きているという最後の俳諧歌などは、現在の慌ただしく生きている私たちにとっても身につまされる心境かもしれない。

(3)「娑婆」と「うき世」

次に、衆生が繰りひろげる「娑婆世界」や「うき世」への執着も強まっていく点について考えてみたい。

まず「娑婆」とは、さまざまな煩惱から脱することのできない衆生が、苦しみに耐えて生きているところであり、釈迦如来が衆生を救い、教化する世界、また現世や俗世界を意味する。すでに40歳の中頃に「遊民遊民とかしこき人に叱られても、今さらせんすべなく

また今年 娑婆塞げぞよ 草の家」(『文化句帖』文化3年、44歳)⁵⁾のように、「娑婆」の句を詠み始めている。ちなみに「娑婆塞」とは、ごくつぶし、生きていても何の役にも立たない者。邪魔者などの意味である。『七番日記』時代になると、さらに「娑婆」の句を次のように詠んでいる。

又ことし 娑婆塞(しゃばふさげ)なる 此身哉 (『七番日記』文化9年)
苦の娑婆や 虫も鈴ふる はたをおる (『七番日記』文化11年)
娑婆の風に はや筍の 瘦にけり (『七番日記』文化12年)⁶⁾

「うき世」には、二つの意味がある。第1は、「憂き世」であり、辛い世の中。苦しみに満ちたこの世の中。(出家生活や極楽浄土のような仏教的世界に対して)この俗世間。夢まぼろしのようなはかない世界。無常の世の中といった意味である。第2は、「浮き世」であり、たとえば式亭三馬の『浮世風呂』のように、享樂的に生きるべき世の中という意味で、とくに江戸時代に前代の厭世的思想の裏返しとして出てきたものである。はかなくて定めのないものだから、深刻に考えないで、うきうきと享樂的に過ごすべき世の中という意味である。一茶の『七番日記』の中にも、この種の句や俳諧歌が多く見られる。

鳴くな雁 どつこも同じ うき世ぞや (『七番日記』文化9年)
露はらり はらり大事の うき世哉 (『七番日記』文化9年)
朝顔も 銭だけひらく うき世哉 (『七番日記』文化10年)
そよ風に 吹かれ吹かれて うき草の
うき世並とて 花のさくらん (『七番日記』文化13年)
つかの間も 汀^{みぎわ}*にうごく うき草の
うき世並とて 花のさく哉 (『七番日記』文化13年)⁷⁾

*汀(みぎわ)…波打ちぎわのこと

こうした娑婆やうき世のいわば現世的志向が、晩年に近づくにしたがって、より一層強まっていくことになる。次の内容もそれを表している。

「極樂も 地獄も活(いき)て 居(い)るうちぞ
死(し)に)ての後は 何か有(ある)べし 空翠(くうすい)
いささかてには違(たが)ひけると覺ゆ。此人はいかに世界を看破*したるならん。」(『七番日記』の文化7年、一茶48歳)⁸⁾

*看破…正しく解すること、見破ること

これは、空翠という江戸蔵前札差問屋の主人で本名を大口屋八兵衛という俳人が詠んだ狂歌（滑稽や諧謔の意を盛り込んだ短歌）に対する一茶の感想である。この中で、“うき世の中にこそ極楽と地獄があるのであり、死んでしまえば一体何があるだろう”という、かなり現実的なこの空翠の歌に対して、一茶は「世界を看破したるならん」と評価している。一茶の心境としては、おそらく、“空翠さんはりっぱなもんだな。こんなに割り切ることができて。自分なんざあ、そこまで割り切れなくてこの娑婆世界に生きているよ”といったところではないだろうか。

さらに、一茶のこうした現世的志向に基づく娑婆やうき世としての「天地大戯場」の自覚は、文化後期になって、衆生が繰り広げる世界、つまり「共生的世界」ともいえる、より広大な生きとし生けるものの世界を切り拓き、彼独自の俳風を産み出す大きな原動力となったと考えられる。それがよく現れている作品が、まさにここで紹介している『七番日記』なのである。

（４）『七番日記』にみる共生的世界

一茶は、このうき世というはかない現実の世界で、いのちを与えられて生きている人間をはじめとするすべての生あるもの（衆生）が、互いに喧嘩もし、また押合いへし合いしながら、みな喜怒哀楽の中で悪戦苦闘しながら生きているととらえる。次に紹介する句と俳諧歌は、そのような一茶の心境をよく表現している。

露の世の 露の中にて けんくわ（喧嘩）哉 （『七番日記』文化7年）
 露の世を 押合へし合 萩の花 （『七番日記』文化11年）
 さく花の 中にうごめく 衆生哉 （『七番日記』文化9年2月）
 天人や 人見おろさば むさしのの

草葉にすだく* 虫とこそ思え （『七番日記』文化9年5月）⁹⁾

*「すだく」（集く）…多くの者が群がり集まる。多くの鳥や虫などが群がって鳴く。

また、次の俳文にもその特徴が伺える。江戸時代は言うまでもなく身分制社会であったわけであるが、先に述べたように、うき世や娑婆の中で衆生はみな悪戦苦闘しながら生きているのであり、それは身分などと関係がないと一茶は考える。次の文章は「株番」（文化9年50歳～文化13年54歳までの手記）の一節であり、それをよく表している。

「布施東海寺に詣けるに、鶏（とり）どもの迹をしたひぬることの不便（ふびん）さに、門前の家によりて、米一合ばかり買ひて、菫蒲公（すみれたんば公）のほとりにちらしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始（はじめ）たり。其うち木末（こずえ）より鳩

雀ばらばらとび来たりて、心しづかにくらひつつ、鶏の来る時、小ばやくもとの梢（こずえ）へ逃げさりぬ。鳩雀は蹴合（けあひ）の長かれかしと思ふらん。士農工商其外さまさまの稼（なりは）ひ、みなかくの通り。」（下線引用者）¹⁰⁾

*「鶏の蹴合」は春の季語。春は最も鶏の闘争力の盛んなとき。

そうした一茶であるからこそ、この娑婆やうき世で権力を笠に着ていばっているような武士に対して反発心も生まれてくるのである。

涼まんと 出づれば下に 下にな	（『七番日記』 文化14年）
武士（さむらい）や 鶯にまで 使はる	（『七番日記』 文化10年）
かしましや 將軍様の 雁ぢやとて	（『七番日記』 文化9年）
武士町や 四角四面に 水を蒔く	（『文政句帖』 文政5年） ¹¹⁾

さて、先にも述べたように『七番日記』の中では、生きとし生けるものすべてのいのちの躍動を詠んだ句が急増していることがわかる。とりわけ、小さいのちに対する一茶の親愛のまなざしが強く感じられる句が多く見られる。

わか竹や さもうれしげに 嬉げに	（文化9年正月）	50歳
細竹も わかわかしさよ ゆかしさよ	（文化11年4月）	52歳
有たけの 力出してや 秋の蟬	（文化11年8月）	
いざさはげ わか盛ぞよ 吉野鮎	（文化12年3月）	53歳
それぞれに 盛持けり 苔の花	（文化12年6月）	
一つ蚊の かはゆらしくも 聞へけり	（文化13年5月）	54歳
飛下手の 蚕のかわいさ まさりけり	（文化13年6月）	
じっとして 見よ見よ蟬の 生れ様	（文化13年6月）	
たのもしや 棚の蚕も 喰盛	（文化15年3月）	56歳 ¹²⁾

ちなみに「共生」とは、辞書的な解釈をすれば、別種の生物が一所に棲息し、互いに共同生活を営むと考えられる状態を意味する。さらに「共生感」という言葉には、人間が自分以外の事物に共通の生命をもつとみなす世界観の意味が含まれている。『七番日記』の中の句を読み進めていくと、まさに一茶の「共生感」に基づく世界が描き出されていることがわかる。文化前期においても、徐々にその傾向が見られ始めるが、この『七番日記』（文化7年～文化15年）時代に至って、生きとし生けるものすべてが共通の生命をもって繰り広げる共生的世界が見事に開花してくるのである。また、その共生的世界を描き出すこと

を好んで一茶は自ら積極的に詠んでいたといえる。それを証明するのが、次に紹介する一連の句である。この「○」「△」「ゝ」は、一茶自身が付けたものと言われている。¹³⁾

○はつ雁や 芒はまねく 人は追ふ (文化8年6月)

○出て行ぞ 仲よく遊べ きりぎりす (文化8年9月)

○小むしろや 蝶と達磨と 村雀 (文化9年2月)

*小(さ)は接頭語、むしろ、敷物

○鹿の子の 迹から奈良の 鳥哉 (文化9年5月)

△苔清水 さあ鳩も来よ 雀来よ (文化9年5月)

ゝ、狗に 爰迄来いと 蛙哉 (文化10年正月)

ゝ、それがしも 連にせよやれ 帰雁 (文化10年3月)

ゝ、人あれば 蚊も有柳 見事也 (文化10年4月)

ゝ、前の世の おれがいとこか 閑古鳥*

*閑古鳥…かっこうの異名。(参考)「閑古鳥が鳴く」…生活が貧しくてびびりしていることのたとえ。人のおとずれがなく閑散としているさま。

○又泊れ 行灯にとまれ 青い虫 (文化10年8月)

猪熊と 隣づから*や 冬籠 (文化10年10月)

*「づから」…普通は人間関係を表す類の名詞について、その関係にある者の意を表す。(となりどうし)

○竹に来よ 梅に来よとや 焼の哉 (文化11年3月)

○わらんべも 蛙もはやす 焼の哉 (文化11年3月)

ゝ、麦に葉に てんてん舞の 小てふ哉 (文化11年正月)

ゝ、起よ起よ あこが乙鳥 鳩すずめ (文化11年正月)

○狗と蝶 他人むきでも なかりけり (文化12年正月)

○鹿の角 かりて休し 小てふ哉 (文化12年正月)

○くやしきも 熟柿仲間の 座につきぬ (文化13年閏8月)

ゝ、馬の耳 一日なぶる 小てふ哉 (文化13年5月)

○、雁鳴や 相かはらずに 来ましたと (文化14年正月)

○一人前 柱にもある きのか哉 (文化14年8月)

○とべ蛩 野ら同然の おらが家 (文化15年4月)

○よい世とや 虫が鈴ふり 鶯がまふ (文政元年8月) ¹⁴⁾

以上、一茶晩年の死生観の形成基盤の特徴について、とくに『七番日記』を通して見てきたわけである。つまり、一茶自身、50歳前後から老いの自覚が強まり、いやでもこの世の無常を感じないわけにはいかない一方で、衆生が共に生きる娑婆やうき世と呼ばれる世

の中で生きようとする、いわば現世への強い執着も見られるのである。こうした死生にかかわる志向が、晩年さらに一層鮮明に表れてくるのである。

3 一茶晩年の生き方の特徴～「他力」と「自力」との狭間で～

(1) 二つの句

さて、文化後期の『七番日記』時代に強まってきた二つの志向、すなわち無常観と生への執着心に基づく「来世的志向」と「現世的志向」であるが、これらを二つの句を通して、具体的に考えてみたい。前者については、「ともかくも あなた任せの としの暮」(『おらが春』文政2年)¹⁵⁾であり、後者については、「ことしから 丸儲ぞよ 娑婆遊び」(『文政句帖』文政4年)¹⁶⁾である。これら二つの句には前文がある。まずそれらを紹介したい。

① 「ともかくも あなた任せの としの暮」の前文

「他力信心信心と、一向に他力に力を入れて頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛れて、自力地獄の炎の中へばたとおち入候。其次に、かかるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚(はだ)になしくだされと、阿弥陀仏におし誂(あつら)へに誂ばなしにしておいて、はや五体は仏染(じ)み成りたるやうに悪るすましなるも、自力の張本人たるべく候。問ていはく、別に小むつかしき子細は不存(ぞんぜず)候。ただ自力他力、何のかのいふ芥(あくた)もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第、あそばされくださりませと、御頼み申ばかり也。如斯決定(かくのごとくけちぢやう)しての上には、なむ阿みだ仏といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長蜘蛛(くも)の行ひして、人の目を霞(かす)め、世渡る雁のかりそめにも、我田へ水を引く盗み心をゆめゆめ持べからず。しかる時は、あながち作り声して念仏申(まうす)に不及(およばず)、ねがはずとも仏は守り給ふべし。是即(これすなはち)、当流の安心(あんじん)とは申也。穴かしこ。」¹⁷⁾ (ふりがな引用者)

② 「ことしから 丸儲ぞよ 娑婆遊び」の前文

「去十月十六日、中風に吹倒されて、直に北ぼうの夕の忌み忌みしき虫となりしを、此(この)正月一日はつ鶏(どり)に引起されて、とみに東山の旭のみがき出せる玉の春を迎ふるとは、我身を我めづらしく生れ代りて、ふたたび此世を歩く心ちなん。」¹⁸⁾ (ふりがな引用者)

「ともかくも」の前文には、「他力」「自力」の語が多く見られ、長女さとを亡くしたときの一茶自身の心境の一端を垣間見ることができる。興味深い点として、まず一つは、他

力を信心しようとするほど自力地獄に陥るという指摘である。一茶は、この娑婆やうき世につかっている煩惱多き凡夫（俗人）が阿弥陀さまのようにきれいにしてくださいと一方的にお願いして、悟りきったような顔をしてすましこんでいるのも、それこそ自力頼みであるという。ではどうしたらよいのかと、さらに一茶は自身に問う。それが第2の興味深い点であり、当時の一茶の心境である。つまり、自力とか他力とか面倒なことは言わず、死んでからのことはすべて阿弥陀さまに任せたらいいのであり、そのように決心するだけで十分であると一茶は考える。したがって、それは、「南無阿弥陀仏」と唱えながら、一方で欲をかいったり、ものを盗んだり、ごまかして生きたり、自分さえよければいいといった気持ちは持つべきではないということでもある。たとえ念仏をしなくとも、仏さまは守ってくれるのである、そう一茶は考えるのである。

以上のことから、当時の一茶の心境をまとめれば、次のような点に集約される。第1は、煩惱の多い「凡夫」としての自覚ということであり、第2は、他力や自力への執着からの自己解放であり、そして第3は利欲にとらわれない素直な生き方の自覚である。これら三者は、一見矛盾しているように見えるが、実は一茶の中では融合していると考えべきであろう。すなわち、凡夫はどこまでも凡夫なのであり、それを素直に受け入れて、少なくとも「自力地獄」にだけは陥らないで、少しでも利欲にとらわれない生き方をしていこうという心境であったということである。ここには、ある意味一茶自身の一種の生き方に対する“開き直り”さえ感じられるのである。

次に「ことしから」の句の前文であるが、「去十月十六日、中風に吹倒されて」とあるように、一茶は文政3年10月16日に豊野町浅野の雪道ですべったひょうしに中風になり半身不随となっている。一茶が倒れる11日前（10月5日）には、次男石太郎が誕生しているので、一緒に枕を並べていたものと思われる。さらに「此（この）正月一日はつ鶏（どり）に引起されて」と書かれてあるところから、文政4年の正月には快復していたらしい。九死に一生を得た思いからか、一茶は「我身を我めづらしく生れ代りて、ふたたび此世を歩く心ちなん。」と当時の心境を記している。当時一茶は59歳であり、まもなく還暦を迎えようとしていた時である。「ともかくも」から2年が過ぎ、自力や他力といった面倒なことは考えまいとするが、やはりこの娑婆やうき世の中で長年どっぷりつかって生きてきた一茶であるわけであり、それに逆らわずに「凡夫」としての自分に対しても素直に生きていこうという表明のようにこの句から感じられる。

（2）「共生的世界」の広がり～限らない〈生〉の表現の追求～

こうした「凡夫」として素直に生きていこうとする一茶の姿勢は、文政期に入り、より一層共生的世界を広げていくことになる。つまり、そこには、常に表現の追求の手を緩めず、よりよい表現を求めていこうとする一茶の姿が浮かんでくるのである。

次の表は、一茶晩年、すなわち文政期に入ってから登場してきた季語である。全体的に、意味が不明なものがあるが、時候、人事、動物、植物、地理などに関する新しい季語が見られる。とりわけ、春と冬では「人事」関係に新しい季語が見られ、夏と秋では「動物」や「植物」関係に新しい季語が見られる。とくに後者に関しては著しいように感じる。その中で目につく現象は、生のはかないだけではなく、しかも一般には忌み嫌われるような生物を、新たに積極的に取り入れて句に詠み込んでいるということである。

【第6期－文政期（56歳～65歳）に新たに登場した季語】

新年の部	春の部	夏の部	秋の部	冬の部
五の春 終江戸の春 庵の春 御忌参り おろし 水神 筆始 初始 初笑ひ 稲積む 諷ひ初 若湯 ふいこ始 年男 手まり 羽つき 若餅 鏡餅 齒固め 福鍋	氷解つらら 二日灸 ふろんど 種俵 鷹化して鳩と成る 田鼠化して うづらと成る 蛇穴を出づ 身寄虫 あざみ 桜草 柳草 九輪草 ぺんぺん草 壬生菜 いたどり 杉菜 土筆 海 密の花	夏の雨 夏座敷 夏芝居 座頭の涼み 麦飯 通し鴨 腐草化して蛭と成る 蠅取りぐも 尺取虫 毛虫 ほうふり 羽蟻 みずすまし たでくふ虫 蜘蛛の子 みみず出づ 草いきれ 踊り花 藪虱 美人草 青 芍薬 芭蕉の花 蚊帳釣り草 芦 いぐさ 一つ葉 胡椒 病葉（わくらば） 楠の花 石梨 すもも いちご	葉月（陰暦八月） 二百十日 初嵐 秋の水 摂待 施餓鬼 大文字の火 八朔（はっさく） 鳴滝祭 田守 出来秋 毛見 ごほう引く 新米 雀大水に入りて蛤と成る 蛇穴に入る 秋の蚊 茶立虫 松虫 みみず鳴く さび鮎 鰯 初鮭 葎（むぐら）の花 白粉の花 千日紅 たでの花 蘭の花 芭蕉 ひつぢ ほほづき ひよどり 狗子草 角力取草 ぶだう 梅もどき みかん すいくわ 南天の実 あけび松笠	短月 寒空 十日ん夜 寒習 年用意 古暦 事納 千葉笑ひ あかざれ 寒灸（かんやいと） 綿入れ 寒栖し 寒鳥 寒雀 犬 蝦夷が島

さらに文政期に入り、急激に増加している季語もある。次の表は、その中でも顕著なものを時代別に分類したものである。

	寛政	享和	文化（前）	文化（後）	文政
蚊	6	6	17	59	75
蠅	0	2	11	21	58
蚤	4	5	0	40	57
若葉	8	2	3	23	38

これらを総合して考えてみた場合、確かに晩年多作になるにつれて、類似句が増加しているが、それ以上に、新しい季語を取り入れて、自己の句作に新風を吹き込んでいることがわかる。そして、自力と他力の狭間に身を置き、素直に生きていこうとする意識の中で、何よりも動物・植物をはじめとして季語の増加により一茶独自の天地大戯場としての「共生的世界」が、一層広がりをを見せているということである。

（３）「自力」と「他力」との中間者（凡夫）としての共生的生き方

では、上で述べたような一茶晩年の生き方をどのように表現できるのだろうか。私はこれを、「自力」と「他力」との中間者（凡夫）としての共生的生き方と便宜上呼んでおきたい。先にも述べたように、一茶自身の中で、「自力」と「他力」は決して彼の生き方において矛盾するものではなく、しかもその両面を素直に受け入れようとするいわば「中間者」（凡夫）としての生き方に、「天地大戯場」としての「共生的世界」という世界観が加わることにより、この世を生きとし生くるすべてのもの（衆生）が、喜びと悲しみ、苦しみと楽しみ、善と悪、是と非といった狭間の中で悪戦苦闘しながら生きている仲間であるということを強く彼の中で自覚されていったと考えられる。

老いの深まりと死の自覚
「来世的志向」（あなた任せ）⇔「現世的志向」（娑婆遊び）
「天地大戯場」としての「共生的世界」という世界観
↓
「他力」と「自力」との中間者（凡夫）としての共生的生き方

４ 「ちう位」について

このように一茶晩年の生き方を考えてきたとき、一つ気になる句がある。それは、「目出度さも ちう位也 おらが春」（文政２年、57歳）¹⁹⁾ という『おらが春』の冒頭に登場する有名な句である。特にその中の「ちう位」という語に注目したい。この語に関して、参考までに、代表的な一茶研究者の評をいくつか紹介してみよう。

【丸山一彦『一茶秀句選』評論社より】

「句の「ちう位」は、中位つまり中程度の意味に解されているが、実は、あやふや、いい加減、どっちつかず、の意の信越方言で、近世では一般にも用いられ、浮世草子などにその用例が見える。」²⁰⁾

【金子兜太『一茶句集』岩波書店より】

「あんまり目出度がりもせず、と言ってはったらかしということでもなく、阿弥陀さまにお任せしてほどほどの（「ちう位」の）正月をとということだろう。」²¹⁾

【黄色瑞華『一茶の世界』高文堂出版社より】

「さて、「ちう位」という方言は、「ちゅっくらい（くれえ）の大きさ」「ちゅっくらいの出来」、または「ちゅっくらいな奴」などと使われる。「ちゅっくらいな家」と言えば、本百姓（自作農）程度の家柄、すなわち、その村落の中位以上の家をさし、「ちゅっくらいの出来」と言えば、一応満足すべき出来ばえ、の意になる。また、「ちゅっくらいな奴」と言うときは、その人物の誠意のないさまを卑しめて言うことになる。したがって、一句の字面から、めでたさと言っても「いい加減なもの」ととられないこともない。一句を作者の自嘲と解すのである。だが、親鸞教徒として、たとえそれが一茶の勝手な解釈であっても、自身の信仰について述べた第二十一話、その章談の結びの句に呼応させた第一話後段の内容から、自足の気持を否定することはできない。そうすると、「ともかくも」命ながらえて新しい年を迎えることができた。私にとって分相應の正月と言うべきだ、と生かされている、生かしていただいている自分を認識し、そっと手を合わせる、そういう気分を読みとるべきであろう。仏は一茶ひとりのためにあるのであって、ここでは他との比較は成り立たない。」²²⁾

この句は一茶の句の中でもとくに有名であるだけに、以上の三者以外にもこの句への関心は高いが、この句の「ちう位」の解釈については、三者のそれぞれの評釈が妥当であると考え。

これらの解釈に基づき、これまで私が論じてきた一茶晩年の生き方の特徴を合わせてさらに考えてみたい。すなわち、「ちう位」の意味が、三者が指摘した「あやふや、いい加減、どっちつかず」（丸山）、「ほどほど」（金子）、「自嘲と自足」（黄色）ということだとすれば、それらを支えている一茶の生き方の根本精神とはどのようなものかということ、さらに明確にしていく必要があるということである。

これに関して、すでに論じてきたように、晩年になるにしたがい、老いの一層の深まりと強い死の自覚により、阿弥陀さまにおすがりしようとする「あなた任せ」としての「来世的志向」と、この現実のうき世で遊民や凡夫として「娑婆遊び」していこうとする「現世的志向」が矛盾することなく、素直に一茶の中で純化し融合していったということであ

る。私は、この「ちう位」の意味も、こうした一茶自身の根本精神に支えられた表現であると考えたい。そして、自らの生の限りない表現の追求による「天地大戯場」としての「共生的世界」の広がりの中で、「自力」と「他力」との中間者（凡夫）としての共生的生き方を貫いていったと考えられる。

5 おわりに

以上、一茶の死生観について、特に彼の晩年における「自力」と「他力」の中間者（凡夫）としての共生的生き方を中心について論じてきた。一茶は、芭蕉のように高く悟り道を究めた人間ではなかったと思う。むしろ、自分でも述べているように「凡夫」「娑婆塞」「遊民」であり、私たち一般人に限りなく近く、親しみやすい存在であると考えられる。この娑婆世界の中で悪戦苦闘しながら群がり、うごめく衆生として、遺産相続問題も起こしたり、人並みの家庭を持ちたいと願い実際に実現した。だがその一方では、凡夫として、生きとし生けるものたちを友とし、また仲間として“平らに”見て、悟りきれないながらも、素直に阿弥陀さまに身を任せるようにしたのである。人間は、喜びと悲しみ、苦しみと楽しみ、善と悪、是と非といった狭間の中で悪戦苦闘しながら生きているのであり、そうたやすく「自力」と「他力」のどちらかに割り切れるものではない。むしろ、自力と他力との「中間者」（凡夫）として、弱さと強さの両面を合わせ持ち、時に仏に祈り、時にしたたかに現実の世界で生きていこうとする存在ではないかと考える。すなわち、その自力と他力の中間者（凡夫）として、このはかない現実の世界の中で同じ生あるものと共存して生きていこうと考え、それを見事に作品として表現したところに、俳諧師一茶のまさに真骨頂があると私は考えるのである。

註

- 1) 立川昭二『日本人の病歴』中公新書、1976年、63頁参照。
- 2) 信濃教育会編『一茶全集（第三巻）』信濃毎日新聞社、1976年、参照。
- 3) 同上書、参照。
- 4) 同上書、参照。
- 5) 信濃教育会編『一茶全集（第二巻）』信濃毎日新聞社、1977年、331頁。
- 6) 前掲書『一茶全集（第三巻）』、参照。
- 7) 同上書、参照。
- 8) 同上書、43頁。
- 9) 同上書、参照。
- 10) 信濃教育会編『一茶全集（第二巻）』信濃毎日新聞社、1977年、331頁。
- 11) 前掲書『一茶全集（第三巻）』、参照。
- 12) 同上書、参照。
- 13) 小林計一郎『俳人一茶』角川書店、1964年、122頁。
「これは自分がよいと思った句に違いない。文化三年ごろから『一茶調の句』に「○」をつけた例がしだいにふう、そうした句を、意識的に作っていく傾向がうかがわれる。」
- 14) 前掲書『一茶全集（第三巻）』、参照。

- 15) 前掲書『一茶全集（第六卷）』、157頁。
- 16) 信濃教育会編『一茶全集（第四卷）』信濃毎日新聞社、1977年、328頁。
- 17) 前掲書『一茶全集（第六卷）』、156頁～157頁。
- 18) 前掲書『一茶全集（第四卷）』、151頁。
- 19) 前掲書『一茶全集（第六卷）』、136頁。
- 20) 丸山一彦『一茶秀句選』評論社、1975年、146頁。
- 21) 金子兜太『一茶句集』岩波書店、1983年、379頁。
- 22) 黄色瑞華『一茶の世界』高文堂出版社、1997年、279頁。